

冒頭発言

友杉 孝

東南アジアの生態環境の展望についての古川さんのお話は、「現在、東南アジアで自然破壊が大変な勢いで起こっていて、その結果、将来はリザーブとして取ってあるところだけに森が残る。それ以外は砂漠になるか、破壊されてしまう。」とのことでした。この環境破壊は、緊急を要する問題で、ジャワ、スマトラ、さらにタイにいたるまで、森林から水田にいたるまでいろいろな事例を挙げて報告されました。大変ショッキングなお話でしたが、生態環境ということですから、都市も含めて議論されたほうがさらに問題がもっと明確になるかもしれないという印象をもちました。都市は本来的には自然ではありませんが、都市が形成されて、ある時間を経過すると、第二の自然というべき様相になってきます。この第二の自然としての都市の生活環境が現在非常に悪くなっている状況があります。その辺も付け加えて下さればありがたい。しかし、この報告の最初にある風土的規範の形成については、私は昨日質問させて頂きましたが、いまでもわかりにくいという印象を拭いできません。

第2のアフリカについて。森の人々の森の中の活動は森を破壊するのではなしに、森の中の豊かさとか多様性をそこに付け加えている。だから、人間の活動を排除したサンクチュアリを設定することは、自然の姿を歪める可能性すらあるという。市川さんのご報告は大変印象的でした。我々はとかく人間活動と自然環境を二項対立的に捉えてしまうのでありますが、ここではそういった二項対立的な捉え方ではなくて、人間活動そのものが自然環境の一部を作っていて、自然環境を非常に豊かにしていくという大変興味ある指摘がありました。これからの自然環境の問題を考える場合、このような自然に対するアプローチを大事にしなければいけないのではないかと思います。したがって、古川さんのリザーブの問題は、法律的に、決められたリザーブだけがあって、あとは破壊しつくされた自然だけが残ることにもなる。リザーブは本来ある自然とはだいぶ違った貧弱なものだということになるわけです。

それから、市川さんのお話で、経済が市場経済化の方向に急速に動いているが、しかし同時に、この経済変動の中でも物々交換が行われ続けていて、その交換比率は変わらないとありました。経済変動に伴って物価が非常に変わるわけですが、しかし同時にそこには物々交換があって人々の生活を維持していくことを可能にしているということです。大変興味ある指摘で、こういった物々交換がなぜ可能なのか、あるいはその場合、貨幣に類似する物があつたのかどうか、いろいろと興味がそそられる問題であります。先ほど原さんのお話になったこととも関係するのではないかと思います。

3番目の松永さんのご報告ですが、このような鮭の話は初めてお聞きしましたので、大変新鮮で多くを教えられました。鮭のしっぽが短くなることから始まって、特に北海道の日本海側の海底が貧弱になるとの話は大変スリリングで、思わずずっと注意して聞き入った次第です。自然環境がどういうふうになってゆくかを個別的、分析的によく捉えております。このご報告の後にありましたコメントの中で、「陸地にある森が海の生態、あるいは魚の豊かさに大変関わるといったことの実証研究はよく分かるけれど、しかしその逆の海の方から森の生態の方への動きはどうか。」という質問がありました。問題を個別的分析的に捉える方法と、そうではなしに全体というもののイメージを持って、それを記述していくやり方が大変鋭く対立的にあらわれたかと思えます。全体を感性的に捉え、それを記述してゆくことは、非実証的では決まてないのですが、そこに入るかもしれない感性の恣意性を、どのように配慮するかという問題があとにまで残ります。一方、個別的に分析的にやることの有効性は明らかですが、そのことによって問題を微分していく場合、あとでどのように積分するか。その積分の仕方が一義的に決まらないことで、全体像はとかく分からなくなりがちです。両方の仕方は良いところも悪いところもあるわけで、具体的研究を進める場合、全体に対する感性による目配りを忘れずに個別的分析的にやる人もいるだろうし、あるいは個別的分析の成果をふまえながら全体的なところでやろうとする人もいるだろうし、多様でしょう。このことは先ほど荻野さんから話がありました地域研究の問題と深く関わりますから、あとで皆さんが議論されることと思いません。

4番目の田中さんのお話は南スラウェシの開拓、森林の開発です。開発にからんで地元とか、外国の資本とか、土地の農民とかが大変錯綜している。よその島からやってきた人、政府の出先機関など、様々なレベルがあるわけです。それらが一つの土地の開発の中でどのように相互に関わるかということのお話です。単純に見られがちなことを、事柄はそんなに単純ではないと教えて頂きました。

最後に斎藤さんのご報告で、日本近世が開発によって自然を破壊することなしに、定常的な、あるいは循環的な自然の利用を可能にしていたという大変興味あるお話でした。しばしば開発とか、経済発展が直ちに自然破壊に結びつくと考えられがちですが、開発が自然破壊に必ずしも結びつかないこともある。そこには社会的規範だとか、倫理があるわけでしょうが、大変これも興味深いことです。

日本では桃山の太閤検地から享保ぐらいに人口が減り、それが一定状態になって、また明治から伸びてきました。なぜ享保ぐらいで変化が起こったのかということも時間があれば教えて

頂きたいと思います。

ここで、私なりにこれからのディスカッションにおいて議論して頂きたいことについてお話ししたいと思います。まず第1に原さんのお話にありましたように、開発と自然環境はどのように関わっているのか。人間が生存し、自然を利用して生きていくこと自体が、自然破壊につながり、人類の歴史を通じて環境破壊をもたらさず、起こっているという話がある一方において、そのような人間の自然に対する働きかけは直ちに現在我々が問題とする自然破壊とは違うのではなからうかとも論じられています。つまり開発、あるいは自然に対する働きかけの歴史性が論じられなければならないのです。実体経済の中で生活することと売ることを目的にものを作る市場経済では大変違う。開発を論じる場合、市場、人口増加、技術の在り方、自然に対する人々の感情などが複雑に絡まって、開発するという現象があります。この辺を整理して、どのような組合せで、どんな場合に自然破壊が起こるのか論議されればと思うわけです。例えば、現在我々が問題にしている東南アジアにおける開発による自然破壊は、歴史的にずっとあったものではなく、たかだか近代になって顕著になった。これは世界全体をひっくめて一つのシステムとした市場経済の発達と無関係ではない。くわえて近代において、ヨーロッパで発達した科学技術が、それ以前とは比較にならないような仕方です。自然に対して働きかけ、破壊を起こした。このように近代を特徴づける開発がここでは問題となるでしょう。このような市場経済が地球的な規模で展開すれば、すでにいわれているように、それ以前からの自立した地域経済は、もはや必要でなくなってしまう。必要なものはよそから持ってくればいわけですから。実体経済とそれを支えていた様々な規範も空洞化する傾向を見せる。自然環境によって規制されていた人口抑制も必要なくなって、人口が急激に増えることも起こり得る。増えた人口は都市に集まってくる。都市では生活環境の劣化も起こってくるでしょう。と、いうことで開発と自然環境の問題の歴史性を是非考えなければいけないと考えております。

現在非常な勢いで市場経済が東南アジアの隅々まで拡がり、農村の生活様式も大変都市化されてきました。そのことが最初の報告の生態環境の変貌と重なってくるのですが、同時に興味ある現象も見られます。農村の市場経済化が、物を基準にした人々の生活水準を随分引き上げていることは疑いない。教育の水準も上がりました。そうすると以前の人口増加率が急に減少しました。自然破壊の一つの原因と考えられる人口増加に歯止めがかかってくるのであります。このように市場経済と環境問題の関係は必ずしも一義的には定義しにくいと思います。

これからの問題として、現在環境破壊を起こしている人口増加、あるいは大衆消費がこれからどう展開するだろうかと議論されると思います。その場合に考えておく事柄の一つは、環境

の問題は市場に任せてうまくいくものだろうかについてです。つまり、環境が破壊され、ある特定のもが希少になれば、そのものの価格は大変上がるから、結局、保存される。あるいは、ある特定のものにたくさんの税金をかけて、大量消費を抑えることが可能かどうかなど。市場経済はこれまでのように私的所有権を絶対としてよいのか、私的なものをどのように制限すべきかが問題になるかもしれない。これまで軽視されてきた商人の社会的役割、社会的交通も再考されるでしょう。昨年のシンポジウムで中村尚司さんは地域自立の経済学という大変ユニークな報告をなされました。地域の自立性がどのように回復されるかを中心としたご意見でした。学というと系統的に整理された物理学の体系みたいなものを想像されて具合が悪いのですが、経済思想ということで、中村さんに後で話して頂ければ大変ありがたいと思います。以上、雑駁なことをいろいろお話ししましたが、議論を深めてゆくことを願って、さし当たってまとめのお話をさせていただきました。

海 田 能 宏

友杉さんが総括的なまとめをなさいましたので、私の方はかなり主観的にある局面だけに限って申し上げようと思います。今回の全体のテーマをしぼる題として「地域と生態環境」が使われましたが、むしろ「地域と風土」という枠組の方が良かったかなあという印象を持ちながら、全体を聞いていました。風土というのは、最近、古川さんが目から鱗の落ちるような素晴らしい定義をなさっております。昨日の発表の中ではこんな表現をされておりました。「自然が豊かな乳房を人間に含ませる、人間は、それにむしゃぶりついて、栄養をとって育っていく。風土というのは、自然の中の万物の間の影響のし合いで、人間は自然に心をかえしていく。人間と自然の交感を目に見える形にしたものが風土である」、という風な定義であったと記憶しています。私はそういう言葉を使って地域と風土ということ考えた方がいいのではないかと思います。これも、私自身にしか通じない手前勝手な比喻かもしれませんが、生態環境から地域を見るといわれた場合に、私の頭に浮かんで来るのが、例えば、次のようなことです。土地を見るのにFAOの Land Classification Guideline ですか、国際的に通用するような土地分類の方法があります。詳しく区分するといくらでも細かくなって、科学的にケチのつけようのない分類体系ができ上がっていますが、それで分類され、切り取られた地域あるいは土地情報から伝わってくることはごくごく限られています。ただ分類されただけです。ケニアの土地も

カンボジアの土地も同じ基準の中で分類されて、そこには訴えてくるものが全然ない。一方、風土で地域を見たらどうなるか。FAOの土地分類基準に比較しますと、こちらはいわゆる local taxonomy ですから、アフリカとアジアと比較しようもないかもしれませんが、その土地の相貌が彷彿として浮んでくるような切り方ができそうです。今後我々の重点研究のなかで「地域と生態環境」というテーマをつめていく時に、やはり風土というのは最初に出てくる言葉かなあという感じを受けながら聞いていました。

古川さんは、レジュメの最後に「生命原理の風土的規範は経済原理に置き換えられてしまうのだろうか?」と書き、一方市川さんは、最後の文章に「様々なレベルの開発によって地域を世界と同じ土俵に乗せることがどのような意味と問題を持つのか、十分な検討を行う必要がある」と書いています。欲をいえば、これらがお話しの最初にあって、これを起点に我々が何を考えたらいいかを議論してほしかったという気がします。

それに対する吉田さんの鋭いコメントがあって、人類史的な時間で計ると、人類の歴史は自然破壊の歴史そのもので、まして、いまのように都市に富、人材、権力、情報が集中した状況下において、田舎の復権、田舎の逆襲ってのはあるはずがない。人類は自然を破壊しつくすところまでいかないと、新たな展開は起こらないのではなからうかと断言されております。それが9割は正しいとしても、そこまでやってしまうと、このシンポジウムの議論はディスカレッジングになってしまう。1割の望みを何に託したらいいかと考えようと思って、私はここに出席しているわけですから、吉田さんのようにズバッと一刀両断されますと、ここで議論が止まってしまう。では、どう考えたらいいか。大変いいヒントが、井上さんの共同体規制についてのコメントです。人間の欲望を抑制する3つのキーワード、法律・法令、共同体的な規制、それからタブーですね。それから、自然の摂理を守る基本は物質循環を断ち切らないことである。この4つの点を強調されました。これは大変いいまとめかたをしていただいたと嬉しかった。

東南アジアにおける人間と環境を見ると、東南アジアにかつてはタブー、言葉を換えれば、豊かな自然観だと思いますが、これはありすぎるほどあった。共同体的な規制もないようで実はあるという気がします。私はこれからの開発を通じた人間と自然の関わり合いにおいて、この2つの言葉（タブーと共同体規制）がキーワードになっていくような気がします。

人間の欲望を抑制するこの4つのキーワードを欠く地域が、例えばラテンアメリカだと思えます。12月、1月とここを旅行してきました。この4つが一切ないと、荒れた景観がずっと広がっていくようになります。ラテンアメリカみたいに1平方キロ10人とか15人とかで人口は希薄なのに、しかも荒れた景観が広がっているところは、法律とか、共同体的な規制とかタブー

とかが希薄なところで、もろにマーケットメカニズムが土地に刻印を刻んでゆくのです。使い尽くされて裸地になって荒れてくるのではなくて、半分も使わない。本当に、粗放的に使いながら、それがまたラテンアメリカでは経済的には最適なのだそうですが、その経済的効率を追求していく結果、ろくに使われないのに土地がどんどん開かれて、森が伐られ低利用の土地が広がっていく。東南アジアでは、強いタブーを持っていることと、共同体的な規制が働く結果、かつては荒れた景観は強く歯止めされ、土地は使えば使うほど豊かな景観を示してきたのです。例えば、誰もが例をあげましたが、ジャワの火山の山麓とか、バリの棚田景観、小盆地空間、ジャワのプ克蘭ガン（屋敷林）の景観にしても、使えば使うほど磨かれていくというふうな土地利用の知恵を我々は持っているのです。

そういうものが開発にどうして生かされないかということです。現代の開発の場面に出てくる資本も計画技法も技術もすべからく共同体的な規範から逸脱し、明らかに何層倍も大きくなってきて共同体から離れてしまっている。それをどうしたら取り戻せるかというのが、キーになると思います。いまは資本も計画技法も技術も、官と企業とに独占されていて、コミュニティはいわばツンボ状態に置かれているわけですが、それはまだ取り戻せるのではなからうか。例えば先ほどの土地分類に戻りますが、いまの開発技法では必ずFAOとか国際土壌学会とかの標準手法は使うが、ローカルな風土に根ざしたような在地の技術を使わない。計画段階において、ちょっと品のない比喻ですが、1000万円程の価値のある事業に500万円ぐらいかけてまず地図を作る。その地図の上にまた500万円ぐらいかけて土壌図を描き、植生図を描き、土地分類をし、水文データをのせ、土地分級をし、そこへデザインを描いて、それが大きな資本によって実施されていく。それを我々は開発の常道のように思いこんでいるのだが、計画を組み立てていくプロセスの中に、在地の技術を押し込み、地元の人たちの思い入れを入れていく計画技法があって当然だと私は思います。

私は、風土性というのはこういうふうなオルターナティブ・アプローチの中でのみ生かされるのではなからうかと思っています。友杉さんも最後におっしゃいましたし、中村さんも主張していらっしゃいますが、コミュニティの自立ということをゴールにおかない限り、開発に明るい曙は見えてこないと思います。自立したコミュニティの緩やかな統合というのが地域を作っていくというピクチャーが描けたらいいと思います。それは全く絵に描いた餅、空理空論では必ずしもなくて、私達が開発の技法を変えることによって解決できる問題なのではないかと思えます。